「日本」解体新書であり、国民国家の解体新書

『過去は死なない』と対をなす歴史原論

成田龍一

▼テッサ・モーリス＝スズキ著、伊藤茂訳『日本を再発明する――時間、空間、ネーション』2・24刊、四六判三〇〇頁・本体二八〇〇円・以文社

本書は、1998年に刊行された*Re-Inventing Japan*の翻訳である。「時間、空間、ネーション」を副題とし、近代国民国家がつくりだした「時間」と「空間」を解析するとともに、この観点から「日本」という「ネーション」を考察する試みで、「国民国家（批判）論」として、1990年代に議論された潮流の延長上に位置する著作といえる。

「日本語版への序文」で、テッサ・スズキは、執筆時に「より開かれた日本」と「閉ざされた日本」との「分岐点」にあると感じていたという。ことばを足せば、世界的に国民国家―ネーションが問われており、そのときの熱気と議論が原著の背後にある。原著は「日本」への関心のあと、日本研究のあらたな動きが、ひとつの渦を作りだしていた時期でもあった。

＊

本書では、冒頭から「日本という観念そのもの」が検討される。「中心」――日本の都市部の教養人の視点から、19世紀に至るまで「異質」「異国風」と「空間」に基づいて把握されていた「周縁」――北のアイヌ社会と南の琉球王国が、19世紀末になると「後進性」「低開発」と「時間」に転移され、そのうえで「日本化」されていくことを叙述する。19世紀末における「日本人」の再定義であり、国民国家としての「日本の再発明」である。

このとき、テッサ・スズキは、「日本の再発明」をめぐっての拠点と根拠を取り上げ、その論理を豊富な事例を紹介しつつ、（日本にとどまらぬ）補助線を引き、国民国家形成の文脈での考察をおこなう。いまではすっかり一般化した知見とも映ろうが、先駆的に、かつ英語圏で記したことは特記されるべきであろう。英語圏では、「日本特殊論」が横行しており、そのゆえのオリエンタリズム的な日本把握が無自覚になされていた。いや、当の日本においても、まだ「日本特殊論」を唱える人びとは少なくなかったなかでの議論である。

加えて、この「日本の再発明」の過程を差異と同化と把握し、「国民国家の自叙伝としてではなく、多くの隣接する社会形態間のアイデンティティの「ダンス」としての歴史」を再発見するように促すことは、いまだに示唆深い。

テッサ・スズキが、国民国家の拠点と把握するのは「日本」のほか、「自然」「文化」「人種」「ジェンダー」「文明」「グローバリゼーション」「市民権」であり、それがそのまま目次となっている。そして、これらのカテゴリーが「日本の文脈」でどう用いられ、「ネーションの形成」にかかわっていくかを、豊富な事例を挙げながら探る。別の言い方をすれば、「時間」と「空間」の関係が考察され、「日本」という集合体を歴史的に解析するのだが、ひとつひとつの章は、初期近代（近世）から近代を扱い、射程は現代に及ぶ。そのテーマが掘り下げられるとともに、国民国家・日本の形成の拠点となりゆく過程がたどられる。

それぞれの考察は、なんとも興味深い。「自然のイメージ」の形成を論じ、「日本のネーションフッド」が、「自然環境」に規定されたり、自然との調和が国民文化の中心をなすのではないとし、代わっていく。「文明」では、川勝平太、上山春平、伊東俊太郎らに強い影響をもたらした和辻哲郎、梅棹忠夫、今西錦司を挙げ、シュペングラー、トインビーらに言及する。「グローバリゼーション」「市民権」は、国民国家形成の拠点ではなく、執筆時の1998年の日本をとりまく環境であり、焦点である。〈いま〉にかかわる事態が、歴史的射程のなかで検討される。

このとき、テッサ・スズキは、酒井直樹と西川長夫の名前を挙げ、ネーションの境界の内部にのみ排除のカテゴリーが存在するのではなく、国境線を超えて「連鎖反応のように複製」されていくということも理解できる。

＊

テッサ・スズキは、たえず状況のなかで思考するなか、出来事を原理的な軸に照応させ、状況を原理的に追及する姿勢を持つ一方、その原理自体も状況のなかで再考する。2000年前後のテッサ・スズキは、『批判的想像力のために』（2002年）、『過去は死なない』（2004年）など、歴史の原理を状況のなかで再考察し、いわば歴史原論に関心を寄せていた。本書は、歴史を叙述するメディア分析を軸に展開した『過去は死なない』と対をなす歴史原論としても読むことができよう。

ともに、さきの「日本語版への序文」で、テッサ・スズキは、（翻訳が進行している）2013年末の日本において、「閉ざされた日本」の方向に舵を切る政府の姿勢は「徹底」しているとも記した。「失われた20年」は、ここにもあることを痛感する。

（近現代日本史）